29M-am04

闘病記を用いた授業の実践―薬学教育で闘病記を用いることの意義―

○門林　道子[1,2], 串田　一樹[3], 堀内　正子[3]（[1]昭和薬大（非）, [2]日女大大学院, [3]昭和薬大）

【目的】「患者中心の医療」と相俟って「当事者に学ぶ」視点から「闘病記」への関心が高まっている。臨床教育の充実がひとつの大きな目標でもある６年制薬学教育において闘病記を用いることはどのような意味をもつのか。薬学部１年生 260 名に闘病記を用いて「患者の心を理解する」授業を行ったので、授業の内容と学生の感想などを報告し、授業に闘病記を用いることの意味について考察する。

【方法】最初に１冊（指定）の闘病記を読み、感想文を書くことを課題とした。次に「闘病記を読んで印象に残ったこと」、「闘病記を読むことは将来薬剤師をめざす自分たちにとってどのような意味があるか」などいくつかの項目を用意して少人数でのグループディスカッション、OHP シートによる発表を行った。最後に闘病記に関して短時間の講義を実施、後日授業全体についての感想提出を求めた。

【結果】「通常の授業では伝わってこない患者サイドからの思いや考えを知ることができてよかった」「身体的なものだけでなく、患者は精神的なケアを求めているのがよくわかった」「生と死を考える機会になった」「他者の意見から学べた」などの感想が多かった。また、闘病記の中に「薬剤師」の登場が少なく医療者としての一般的な認識がいまだに薄い、患者からはまだ遠いと感じた学生も多数いた。

【考察】授業や感想を通して、患者の心理状態や病気の特徴、闘病記の内容への学生の関心の高さ、課題に取り組む意欲や熱心さが伝わってきた。大半の学生は将来チーム医療の一端を担うことをある程度認識しており、患者に共感し信頼される薬剤師をめざす意思と自覚の再確認がこの授業で行われた。患者の側から考える視点の大切さに１年次に気づけたことは感性を磨く意味でも専門教育などにも活かされるだろう。「闘病記を今後も読んでいきたい」と書いた学生が多かった。